

MY
妹
貞操帯
らばあ

小説 空蟬
挿絵 野村輝弥

立ち読み版



プロローグ

第一章 妹がやって来た日

第二章 想い、想われ

第三章 ぬくぬく、べたべた

第四章 お兄ちゃんじゃなきややなの！

第五章 解き放たれたのは

登場人物紹介

Characters



まのみいな 真野美伊菜

かつて彰人と兄妹としてともに暮らしていたが、血のつながりはない。普段は頭の回転も早く気立ても良いが、ずっと想いを寄せている兄のことが絡むと暴走することも。

ほうじょうあきと 方城彰人

方城財閥の跡継ぎに相応しい知力と胆力は持ち合わせているが、物心つく前に母を亡くしたため密かに母性に飢えている。

人肌恋しさに犯した過去の過ちを悔やむ気持ちと、どこかでその再来を望む気持ち。後から後から湧いてくる、ふたつの感情の狭間で、揺れ惑う。

「とっ……にかくっ……」

喉が渴いているせいだ。それとも無意識の成した業か。どうしても「どいてくれ」のひとことが言い出せなかった。

ならばと両手を使って、腰の上の妹を押しつけようと試みる。バスルームの広さが幸いして、転倒後も両腕は自由に動くのだから、うまくやれる——はずだったのに。

むにゅうっ。

「ふあっ……」

悪い時には悪いことが重なるもので、ちょうど美伊菜が身体を前に倒したために目測を誤った。伸ばした両手が、意図せずエプロン越しのふたつのふくらみを真下からつかみ、押し上げてしまう。

妹の唇から漏れた吐息が、まるで喘ぎ声のように聞こえてしまい、また。腰巻タオルの下の勃起が鼓動し、跨る少女の腰を揺さぶってしてしまう。

「お、お兄……ちゃん？ これ……って」

胸に触れられたこと。尻の下で蠢いた異物の正体。二重の驚きに包まれていた少女の顔が、ポツと火がついたように赤らんだ。

「す、すまんっ」

再会してから幾度目の謝罪だろう。それまで御曹司という立場上滅多に頭を下げる事がなかったのに、妹相手に調子を狂わされっぱなしだ。

(にしても、柔ら……かい……)

じかに手のひらで受け止めた感触は、背中に感じたのとは比較にならないほど生々しく、牡の意識を惹きつけて放さない。濡れたエプロン生地の心地もさることながら、その向こうからにじみ出る、妹の体温が手のひらに染み入るように馴染んでいく。

体温とともに伝わる彼女の心音も、兄の鼓動につられたみたいに駆け足になっていた。

「あ、の……」

モジモジと美伊菜が尻を揺するせいで、股間のうずきは増していく一方だ。

「あ、ああ。すぐに手、どかすからっ」

よっほどこちらからも腰を振り出したい衝動が芽生えかけるも、歯を食い締めることで我慢する。

恥じ入りうつむく妹の姿を見てるとよけいに衝動が増長しそうな気がして、あわてて視線を逸らす。

「あ……っ、やあっ」

「……っ、お、おいつ美伊っ……菜？」

手を放さないで。そう訴えかけるように、少女が体重をかけてくる。

持ち上げる形になった双乳が、下から眺めているせいもあって、実際以上に大きく見え

る。ずっしりと伝わる重量感、眼前の少女の成育ぶりをひと際強烈に知らしめてくれた。指震わせるだけでエプロンごと小刻みに弾む柔肉の有様にも、惹きつけられてしまう。

「……また、一緒に……。気持ちよく、なり……。たいの」

下目遣いで告げられた声の、蕩けた響き。胸の鼓動を抑え込めないでいる兄に対し、もたらされた言葉は、まさに誘惑と呼ぶに相応しい代物だった。

(わざとじゃないんだとしたら、天然の子悪魔だ……)

昔、触りっこで初めて股間のふくらみに触れられた際も、似た顔をされた。思い起こした記憶の中の妹は、恥じらいはにかみつつも、期待に満ちた上目遣いを向けていた。

今、目の前の少女もまた、濡れた瞳を差し向けて――。かつてはおずおずと小声だった声の響きは、淫らな感情をさらけ出し、より強烈に男の目と意識を惹きつける。

ずりっ……。

「うく……!」

返事を待つことに焦れたのか、美伊菜の腰が再び躍りだす。

貞操帯のツルリとした感触がタオル越しに擦りつけられる。その、むず痒くもリズムカ
ルな刺激も、相応に甘美で耐えがたかったけれど。

「っふ、あ……お兄ちゃんの手……あった、かあい……」

胸に触れられていることを嫌がるどころか、甘えるみたいに声弾ませ。乳房持ち上げる
手の甲に、震える自らの手を重ねてくる、妹。

日常のそれと同じなはずが、やたら艶めかしく映る微笑みにも心乱される。

(なん、でっ……どうして、今そんな顔見せるんだ)

誘うように、ふやけた表情の妹が鳴く。

エプロンが垂れ下がっているせいで、寝そべった体勢からだ貞操帯は腰紐代わりのベルトが辛うじて視界に映る程度だ。触れ合っているのに、視認できない。それも、卑しい想像を掻き立てる格好の材料となっていた。

今、無防備でいる美伊菜を強引に突き飛ばせば、また転ばせてしまいうに違いない。今度こそ怪我させてしまうことだって、考えられる。そんな懸念が、実力行使に及ぼうとする腕を引き止める。

一方で、妹の乳房の触れ心地と、貞操帯による摩擦。ふたつの抗いがたい誘惑によって際限なく増長し続ける肉の欲求も、行為の終了につながる行動に「待った」をかけていた。ずり……ぬるりゅっ!

「んっ……! は、あ、ア……泡で滑っちゃうの、気持ち……いつ……」

夢にまで見た黒の装具に股間を扱かれている。淫猥な状況に酔いしれたように美伊菜の潤む瞳が蕩けていく。

「く、うつ、あ……」

徐々に湿り気を増す貞操帯の摩擦を浴びて、タオルの奥のペニスが喜びに弾んだ。

「お、重くない……よね? 苦しかったりしたら、すぐに言っただけ、んう……んんっ」

氣遣いながらも兄の胸板に両の手を置き重心を移した、美伊菜。ねつとりと熱を孕んだ彼女の吐息との距離がまた縮まって、ドクリ。胸奥と腰の芯が熱を噴く。

ぬるる……っ。

胸板の上の妹の手が泡に滑り、乳首を思いきり扱いてくれる。

「ふぁ！」

「あ……。えへ……。男の子でも、ココ、気持ちいいんだあ……。♪」

女の子みたいな声で鳴かされてしまった。その気恥ずかしさが尾を引いて、妹に行為をやめるよう言うことも、腕づくで押しつけることも、できなかつた。そうこうするうちに、考え巡らせる余裕自体が快楽に押し出され、失せてしまう。

ぬりゅ！ にゆるぬりゆるっ……。

尻を後方に突き出すような体勢で、美伊菜の腰が踊る。エプロンに隠れて姿の見えない黒の貞操帯は、材質ゆえにか摩擦のたびに熱を溜め込んで火照っていくように感じられた。増してゆく熱さに比例して、妹の腰の動きも大胆になってゆく。

「っ！ うあ……。はっ、あぁうッ……！」

人目を忘れたかのように左右前後と振り動くその様に目を奪われ、摩擦刺激を浴びた肉の棒も、止め処ない喜悅のしびれに見舞われる。

ぎゅむうう……。

「ひゃっ！ あうっ……♥」

ついで乳房をつかむ両手にも力がこもり、楕円状の丸みがひしゃげるほどに強く指を食い込ませてしまった。

「わ、悪いっ」

「ん……んくん、だいじよぶ。……ちよつとびつくりしたけど、気持ち……よかったよ」
力を込めた瞬間に辛そうな顔をしたくせに。すぐに笑顔を取り戻して、何気ない風を装い腰を振りたくる。

(バカ……気を遣われたら、よけいに申し訳なく思うだろ……)

あんな顔を、もう二度とさせたくない。氣遣う妹を再見したくないばかりに、今度は丁寧、そつと這わせた指でふたつのふくらみをこねてみた。

「ひやつ……あ、んつ……お兄つ、ちゃ、あんつ……」

効果はすぐに実を結び、少女は鼻にかかった声をこぼしながら身を震わせる。腰巻タオル越しに感じる貞操帯から、じゅわりと温かな湿り気が染み出てきた——気がする。

「痛かったら、言えよ……」

「……ん♥」

うなずいて、それから照れたのか。妹はわずかにうつむいて、両腿をきゅつと閉じてしまった。跨っていた両足の膝を内側に傾けて、左右くつつけた形。

「うおっ……!!」

肉棒が意図せぬ方向からの圧迫刺激に驚き、ちょうど貞操帯の股間パーツが竿の真上に

やって来たタイミングで歓喜の鼓動を響かせる。

「ひゃっ、ア♥ ダメ……声……我慢、できないよオ……」

言うが早いか手に取ったエプロン裾を口元に咥え込む。そうして声を我慢するつもりでいるらしい妹の腰が、いつそう激しく、弾むように前後に揺れだした。

「ば、かっ……危ないからっ」

彼女が膝を閉じているせいもあって、これまでよりも行き来する妹の股間の形状、状態がより鮮明に感じられる。

氣遣うふりをしてスピードを緩めるよう求めたのは、摩擦に溺れた肉棒がいよいよ腰巻タオルの下で限界を訴え始めたからだだった。美伊菜の腰振りに合わせて波状に響く肉の衝動が、歓喜のしびれを伴って何度も、腰と頭の芯を叩いている。

(エロ……すぎるんだよっ……こんつの、ツツ……!)

ツルリとした表面の形状に加え諸々の湿り気の助けも借りて、黒い貞操帯が縦横無尽に這いずり動く。ついに白日の下にさらされた貞操帯は、たっぷりの水気を含んで濡れ光り、いつそうの妖しさと淫靡さを醸し出している。

黒の表皮の奥からは、摩擦のたびにクチュクチュ水っぽい音色が響いていた。汁気は今にもはみ出してしまいうな妹の股肉にも付着して、赤みの差した肌色をテカらせている。そんなエッチな液体の出所。濡れてよりいつそう食い入る貞操帯の内側の状況を想像して、また肉の棒が跳ねた。

「んう！ あ、あつ……。どんどん、大きくなる、ね。嬉、しつ……。んっ、んんんっ」
ただ激しいだけじゃなく、時折リズムやタイミングを変えて擦ってくるので、刺激への備えがままならず。与えられる快楽を丸々受け止めざるを得ない。

「ひ、あつ……。やあ、ヌルヌル滑っちゃ……。つ。ふあつあああ……。」

石鹸泡による滑りという不確定要素にさらされる妹も、その点は同様だ。

「つ……。いつの間に、こんな……。っ」

グチグチと汁気を泡立たせながら前後する、漆黒の貞操帯を見つめながら、実感する。かつてはされるがままなことも多く、精々が兄の真似をし触れてくる程度だった妹。それが、八年の歳月を経てこんなにもはしたなく成長して――。

別れていた間の出来事を一切知らないだけに、腰にせり上がる肉欲のたぎりとは別に、なんとも形容しがたい感情に襲われ、つい声を荒らげてしまった。

「んんっ、あんっ……。お兄ちゃんのっんっ、せい、だもん。お兄ちゃんの……。だからあ（俺の……。なんだって？）」

美伊菜が言いよんだため発言の一部が聞き取れなかったが、やはり「俺のせい」であるのは間違いないようだ。改めて突きつけられた事実には、罪悪感が込み上げるも――。

「んむうっ……。」

不意に、乳肌に張りつけっぱなしだった指先が硬いものに触れた。

濡れて張りつくエプロン越しの、ふたつのふくらみ。純白ブラに覆われたその丸みにポ

チリと咲いた突起箇所を、指先の感覚だけを頼りに押し込み、転がしてやる。

「んうっ、ふう、ふううんんっ……っぶあ、そ、こっ、弱いからダっ、あメえっ」

妹が歓喜に鳴くたびに、きつく狭められた足と足の狭間で、圧迫されながら擦られた肉の棒が猛り、波打つ。繰り返し頭の中で喜悦のしびれが弾ける中、甘い鳴き声にせつつかれ、妹の乳首を攻め立てる。

「ひあ！ そ、そんなにされたら、お股のほうに集中っ、できなくなっちゃううう」

啞えたエプロンをこぼしかけ、啞え直しては喘いで、またあわて——そうして途切れ途切りに発せられた言葉とは裏腹。貞操帯は泡と汗とその他諸々たっぷりの潤滑油を介し、なお滑らかに肉棒の上を歩き来する。

くちゅうっ……。

「ひやうう……ひやらあっ……」

やだ。恥ずかしい。そう言いたかったらしい妹の股間を覆うパーツが、とうとう収めきれなくなつた蜜汁をこぼしだす。あふれるそばから摩擦で攪拌かくはんされ、泡立ちながらクチクチいやらしい音を奏でる。妹の、性的快感の証。

（あの……いつも俺の後ろについて回つてた美伊菜が……こんな、滴るくらい、濡らして……感、じて……る）

ドクン——！

「っぐ！」

現実を改めて実感し、受け止めた途端。腰の芯からこれまでにない衝動が湧き上がった。
「んう……っ♥ い、今ビクンって……したああ」

はち切れんばかりにふくれた肉棒が、青筋の浮いた竿を小刻みに震わせて、限界の接近を訴える。堪えに堪え、溜めに溜めた肉欲のたぐりを噴き出そうと、延々脈打っては先端から先走りのツユを吹きこぼす。

「おにいつ、ちゃああんっ……」

「うあっ！」

感極まって前のめりに抱きついてこようとする妹の身体を、左右の乳房をつかむ両腕を突っ張ることで支え、押しとどめる。

美伊菜を支えることに一旦意識を集中させたおかげで、摩擦を浴びる肉棒がタオル下で歓喜の先走りを盛大に漏らす。濡れて張りついたタオル越しにくつきり浮き上がる肉竿の上を攻め上がる妹の股間もまた、大量の汁で濡れ湿っていた。

「ふあ、あつ、あつ……!! も、もおつ、きちやうううっ……」

「来る、って……お、おいつ? うく、あ、ううっ、美伊っ、菜……!!」

前後の摩擦だけに特化した妹の余裕のなさど、喘ぎ声の質の変化。甲高く浴室に響き渡った鳴き声から、理解する。

(美伊菜も、イク……んだ。俺の目の、前で……っ)

ぬりゅっ、ぢゅりゅ、にゅぬりゅりゅるっ!

「ンッ、あッ……ふあ、あっああっあつくうううンン♥」

「……っ！ くっ……あああっ……！」

昂った腰の芯底と、茹だる脳の求めに応じて、他のことなど一切考えられない状態に陥り、遮二無二腰を擦り合う。白濁色の熱を内にたぎらせて、放出の瞬間を待ちわびる肉棒がまた盛大に弾んだ。

(あ……!!)

霞む目で改めて見つめた摩擦の接地面。いつの間にか腰巻タオルが解けて外れ、剥き出しの肉竿と黒の貞操帯がじかに擦れ合っていた。

(俺、の……が、美伊菜の、アソコと……ッ!!)

あともう一枚。濡れてヌラヌラと光っている貞操帯さえなくなれば、直接接触合える。脱衣所に置いてある鍵を使って、取り外してしまえば――。

(なに、考えてんだ俺っ……こいつは、妹なんだっ……!)

トロリ蕩けた瞳を向けて、甘い声を迸らせていても――妹だ。見つめているだけで息苦しいほどの胸の締めつけに襲われたとしても、それでも。

「ひっ、あ……貞操帯の中、グチュグチュだよおっ、ふあっ、あっ、あああ……っ！」

美伊菜はタオルが外れたことに気づかず、目を閉じ夢中で喜悦の渦に吞まれている。そのことがまるで「兄にあるまじき想い」からも目を背けてくれているようにも思えて、また。わずかに緩んだ鈴口より先走りのツユが迸った。



「それはコタツの中だからだろ。ていうか、お前の足のほうが熱いっ」

どれほど前からコタツに入っていたのか、美伊菜のつま先は火照り汗ばんでいて、ニーソックス越しでも滑らかに、こちらのズボンの上を這い回る。

(やっ、ば……)

じれったい刺激を浴びた股間が、トランクスの奥でうずきながら存在を主張し始めた。コタツの熱気に負けじと血潮を集めた肉の棒が、今にもムクリと屹立しかねない。

「い、いい加減にっ」

おふざけは、もうしまいだ。告げようとした矢先に、はにかんだ美伊菜がまた意外な行動に出る。

まず、願い通りに彼女の足が股間から離れたことに、束の間ほっとさせられた。

「ん……っしょ」

そして次の瞬間。まるで当たり前のことのようにコタツ布団を被って中へ。頭から突っ込んだ彼女の姿に、啞然とさせられる。

「こ、こちら！ 尻！ 出てるから！」

頭から肩、胴とコタツに潜らせた彼女の、腰元。スカートがめくられて、貞操帯の一部と剥き出しの生尻とが露わとなっていた。正座した桃尻部分だけがコタツ外に露出するその様は幼き日の——ベッド下に潜り震えていた妹の姿を思い起こさせた。

(でもあの時とじゃ、尻の大きさが、全然っ……)

今いる場所からだと角度的に谷間に息づくすぼまりは覗けなかったが、肉の乗った丸みと、それをふたつに割る深い谷間。貞操帯に絞り出され、身じろぎのたびプルンと弾む双臀。どれも柔らかかなもみ心地を想起させるに十二分すぎる破壊力を備えている。

——すぼっ。

恥ずかしがるように一、二度。小さく揺れた生尻が、コタツの中に吸い込まれていった。

「あ……」

もう少し、見つめていたかったのに——素直な気持ちさが声の響きに表れる。

すぼっ！

「ぶはっ」

「うわ！ きゅ、急に出てくるんじゃない」

そんなこちらの心境を知るよしもない少女の上半体が、勢いよく飛び出してきた。

コタツの中が熱かったからなのか、上気した頬にほつれ髪がかかっている。それがまた妙に色っぽく感じられて、よけいに胸掻き乱される。

(近い近い！ 顔、近いって！)

こちらの身体を跨ぎ、のしかかる形で出現した少女の上半体。その温みと柔らかさに感じ入ったのも束の間。彼女の火照り顔が、たがいの息が吹きかかるほどに接近し、至近距離で目を合わせてしまった。

「……お尻。じっと、見てた……」

「見せたんだろ。そっちが」

少しむくれ気味。多分に羞恥の色を含んだ顔で、詰め寄ってくる。プリプリふくれて揺れる頬を見る限り、もつともなこちらの言い分にも納得はしていないようだ。

「……これからすることは昨夜からの決定事項です。お兄ちゃんに拒否権はありません」
膨れっ面のまま。唐突に、告げられた。

「は？」

一方こちらは、まだ生尻の衝撃の余韻に心乱れたまま。胸が高鳴ってしまっているせいで、彼女の意図するところをうまく理解できない。その一瞬の逡巡が命取りだった。

「……っ！ うわああっ！ な、なにしてっ」

気づいた時にはすでに我が腰のベルトが外されていて、真剣な顔した美伊菜の手がズボンを引きずり下ろしている、真っ最中。

ジッ、ジジッ——ずるっ！

「待て待て待てええええっ！」

制止の声も空しく瞬く間にジッパーが下げられ、ズボンも膝まで下ろされてしまった。露出したトランクスの前は、こんもり盛り上がってしまった。外気にさらされ身震いする股間の中心で、熱を放散するがごとく脈を打つ。

「ひゃ……っ。も、う、こんなに……？」

驚きに揺らいでいた瞳をびったりそこに張りつかせ、生唾を飲んだ少女がつぶやいた。

(しようがないだろっ！ お前と触れ合ってるんだから)

寄り添う少女の細腰、押しつけられる胸の重量感と弾力。そして、ちょうどこちらの内股と擦れ合う貞操帯の、コタツで温められ熱々の、滑らかな触れ心地。

どれも魅惑的で、股間にダイレクトに伝わった。歓喜の衝動に、肉の棒が湧き立つ。勃起に気づかれた瞬間からは羞恥も加わって、ますます肉の芯が硬くなっていく。

「あつ。に、逃げちゃだめえ」

後退する兄の腰に体重をかけて引き止める。妹の顔は真剣そのものだ。

「そ、んなこと言われてもっ……」

つい数分前まで無邪気にじゃれ合っていた。それが、突然生の尻を見せられて――。怒涛の流れを述懐し腰を引く間も、トランクスを押し上げる肉棒の勢いは増す一方だ。

(こんな、自分でもわけわからなくなるくらいドキドキしてる状態で触られたりしたらっ) 美伊菜が相手であるだけに、きつと堪えられない。思った瞬間自然と腰が引けていた。

必死にズリズリ、尻餅状態で後ずさる。今やコタツには膝下が浸かるのみ。

「ま、待ってってばあ」

焦りの色を加えた彼女の手に引つ張られ、ズボンはもはや穿き直すこと叶わず。両足のソックスを巻き込んで見事に脱げ落ち、ともにコタツの中に置き去りとされた。

涙ぐんで迫り来る童顔を目に留めた途端。口づけたい衝動が胸を突く。

「え、えいっ！」

「ふあっ……!!」

逃すまいと、美伊菜の胸が、思いきりこちらの股間の上へのしかかってくる。

反射的に女の子みたいなきき声が出てしまい、恥ずかしくなつて一瞬後退する意識が削がれた。タイミングよく彼女が体重をかけてきて、完全に腰の動きを止められる。

「あ……っ。い、今、おっぱいの下でヒクンって……。男の子はみんなおっぱいが好きなんだって、先輩のお話。やっぱり、本当だったんだ……」

嬉しげに目を細める妹の柔らかな圧力に肉棒をたぎらせつつ、思わずにはいられない。

(どっ、このどいつだ。すぐに信じるコイツによけいなことを吹き込んだのっ……)

「パ、パンツも……下ろしちゃう……ね」

ごくりと生唾を飲む美伊菜の顔も、上気している。コタツの熱気のせいだけではないと示すように、羞恥と艶めかしさをない交ぜにしたその表情に射抜かれて、また。腰の芯が脈を打つ。

(やっ、ば……柔らか……い)

衣装越しだというのに、温か度ふにふにとした感触が鮮烈に伝わる。柔らかな圧迫を意識するたびに頭の奥が熱を孕み、抵抗の意思が削げ落ちていく。

期待に満ち満ちた視線にさらされては、なおのこと。

ず、るっ……びたんっ!

「ひゃっ!!」

にこちらを向いたまま。恥じらいを備えつつも大胆な様子に、そそられる。

思わず生唾を飲み込んだ途端。高鳴りっぱなしの心臓から甘苦しい感覚が噴出し、眩みそうにもなった。わずかに上体を持ち上げる所作にすら艶めかしさを感じ、目を奪われた。

「……っ、あ……」

体裁を忘れて、何度も荒く熱い息を吐く。

ひとつ、またひとつ。ボタンを外す所作がのろろとして見えて、胸の奥と肉棒が焦れてしまう。実際は美伊菜も急いで脱ごうとしてくれているのに、緊張と羞恥で震える指先がたどたどしく、結果的に遅々としたスピードで、メイド服ははだけられていった。

「あ、あんまりじっと見られたら恥ずかしいよう……」

ブラジャーを期待し目を凝らす瞳に飛び入ってきたのは、肌色一色の夢景色。そして羞恥から今にも泣きだしてしまいそうな美伊菜のハの字に折れて震える眉根だった。

(っ……!! それを見るな、っ……無茶言うなよなっ)

彼女は初めに「昨夜からの決定事項」だと告げている。つまり、最初からこうするつもりでノーブラ状態でいた、ということだ。

彼女へ向ける想いを自覚した直後であるだけに、期待してしまう。妹も、美伊菜も同じ想いを抱き、迫ってきてくれていたのではないか――。

「ふ、あ……触れてると……火傷しちゃうそおっ……」

言いながらも勃起したそれから目も肌も離さない。少女の濡れて揺らめく瞳と汗ばんで

上気した素肌の息遣いを受け止めて、肉の芯がまた硬度を増した。

やや上向き円錐形の巨峰がふたつ。目下でプルリと弾み、谷間で息づく肉棒の幹をかすめる。左右の柔肉の突端では桜色のポッチがツンと突き出し、存在感と持ち主の昂奮ぶりを如実に示している。

（小さい頃の触りっこでも。この間のお風呂で……した時も。オナニーしてるのを見た時だって、ドアの隙間からだったせいで見られなかった。それが……）

「ん……っ♡」

今、美伊菜自身の手で露わになって、ぼふ……と再度覆い被さってきた。感激。歓喜。衝撃。様々な感情が一緒くたになって雪崩込んできて、ひっきりなしに胸が高鳴る。

なにより、吸いつかれてると錯覚するくらい滑らかで瑞々しい乳肌の感触がたまらなく魅力的で——もう、ひと時の我慢もならなかった。

「……っぐ」

びくん！ びくびくっ！

「ふあ……っ！」

期待に弾む肉棒を目に留めて、美伊菜が瞳を輝かせる。観察される羞恥に惑いながらも感じ入っていた少女の手が、そつと自らの乳肉に添えられた。

「は、初めてだけど頑張るから……。い、痛かったりしたらすぐに言ってね」

ぱふ——。口を挟む間もなく左右から乳肌が迫ってきて、期待に咽ぶペニスを包み込ん

でくれた。

「うう……っ！」

温かな肉に包まれた肉の幹が、柔らかな圧迫に呼応して打ち震え、なお屹立する。

「んっ……う、ふあ、ん……い、痛くは、ない……?」

「あ、ああ……だいたいようぶっ……っあ！」

たつぷりの肉厚と、マシユマロみたいなの、フニフニとした柔らかさ。美伊菜自身の手で押しつけられ卑猥に形を変えるその内に包まれた牡の象徴が、悦びの衝動を訴える。

おたがいの肌が汗ばんでいることも乳肉と肉棒との吸着にひと役買って、ますます喜悅のしびれが強まった。

——ずりりっ！

「ふあっ、あっ……!!」

包んだ肉棒の脈動に呼応して小刻みに弾む声音と乳肉が愛しくて、自然と腰が持ち上がる。図らずも摩擦を浴びた肉幹がまた喜悅の鼓動を響かせ、乳谷を突き上がり、谷間から顔を出してさっそく、先走りのツユを噴き出した。

「あぶ……あ。これ……お兄ちゃん、の?」

飛び出た透明汁を浴びた美伊菜の濡れ光る唇と、呆然とした後に耳まで桜色に染まって羞恥する様。いやらしさと愛らしさとを混在させる想い人の姿に、ひと際欲情してしまう。

「……っ、尻。熱くないか……?」

昂るあまり乱暴に動きたがる気持ちを鎮める時間が欲しくて、そう問いかけてみた。

「ン……っ、ふえ……？ ……うん、大丈夫。さつき、電源きっちゃったから」

存外手際がいい。こちらの脚の間に寝そべり、腰から上をコタツの外へ出す彼女の笑顔に、ほっとしたのも束の間。

ずりりゆっ……。

「んっ、う……しょ。ンツ……それに、お兄ちゃんのほうが熱々……だもんっ」

とうとう積極的に乳を上下させ始めた美伊菜の熱心な手つきと瞳に翻弄される。

(美伊菜のおっぱいに包まれてるだけでやばいっ、のに……パイ、ズリ……っ！)

緊張と昂奮、そして歓喜。三重の感情に見舞われた心臓が飛び跳ね、呼吸は乱されっぱなし。ゾクゾクと腰の底から迫り出してくる甘美な衝動の命ずるまま。後ろ手に手のひらをつき、気づけば自ら腰を振って肉悦楽を貪っていた。

ぱちゅっ！ ぱんっぱちゅっ！

上に乗る少女の重みをもとせせず、反動をつけた腰を双乳へ打ちつける。

「あっンツッ！ おにつ、いつ、あっ、あああっ!!」

予想外の反攻を受けて動揺しながら、揺らぐ乳肉の主が、声に歓喜の色をにじませた。腋を締め寄せ上げられた乳肉が、行き来する肉棒にまるでキスするみたいに吸いついてきて、ニチュニチュ、汗も絡めたはしたない音色を響かせる。すっかり勃起した乳首もペニスの幹にたびたび擦れ、よりいっそう硬く尖り立っていった。

「ふあ！ やつ、あ……ああつ……ちよ、ちよつと待つてえええつ」

(待てるかつ！)

たぎる肉欲はさらに一段、もう一段。際限なく刺激を望んで、煮立っている。

が、涙ぐんだ美伊菜の瞳にも魅入られて、どうにかこうにか情欲をやりすごし。少しだけ腰の速度を落としてやる事ができた。

「ふっ、う！ ンうっ……ううっ。も、もうっ。今日は私がするって言ったのに」

「……っ、すまん」

初生おっぱいに感激のあまり、暴走してしまった。態度でも示しつつ反省の弁を口にすると、泣きだしそうだったのが、また一転。

「うー、いけないお兄ちゃんには、お仕置き……しちやうんだからあつ」

頬ふくらませた少女の手が、自らのロングヘアに添えられる。

「……っ、お仕置きって。一体なにを？」

相手の出方をうかがっていると、おもむろに黒髪がひと房、取り出され。

「お、おいつ!？」

焦れて乳の谷間から顔を出した肉の幹に、ぐるぐるり。手早く幾重にも巻きつけられてしまった。

「ン……っにや、ア……髪の毛からもお兄ちゃんの熱、伝わってくるよお……っ」

髪でじかに熱を浴びた美伊菜の甘い声音と蕩け顔が、惑う牡の肉欲を煽り立てる。



咳自体は可愛らしい響きだったけれど、咽る姿が痛々しい。

「ほら、じつとしてろって。薬は飲んだのか？」

なぜか、その質問には沈黙が返された。

（そういやコイツ。子供時分は粉薬やカプセル薬が苦手だったっけ）
母親が大層難儀していたのを覚えている。

「まさか、今でも？」

疑問を肯定するかのようになり、こくり。口元まで布団を被った美伊菜がうなずいた。
「……子供か、お前は。苦いとか喉越しが嫌だとか、そういう場合じゃないだろう」

「お、お薬はちゃんともらってあるもんっ」

あわてて布団から飛び出した彼女の右手が、持っていた小さな袋を見せつける。

（方城のかかりつけ医が診たつてことだし、そりやそうか）

月一度の検診で必ず顔合わせる、女性医師。融通の利かなさが顔に出ている彼女であれば、患者自身が嫌がろうと薬を渡して帰るだろう。

「じゃあ、さっさとそれ飲んで寝ろ。身体冷やさないようにな」
薬を飲んで安静にしておけば、じきに熱も下がるはず。

右手が飛び出た際にめくれた布団を直してやって、ひと安心。

「それじゃ」

「お、お兄ちゃんっ！」

足早に立ち去ろうとしていたところを呼び止められ、再度振り向いた先で、美伊菜はまだ薬の袋を前に掲げた状態を維持していた。

(腕も疲れるだろうに、なんだってんだ)

熱のせいか上気した頬や、吐息をこぼす口元。伏し目がちの表情がまた妙に色っぽい。

「お、お薬の種類のとこ……っ、あ、あの、よく……見てくださいっ」

「……？」

普通、風邪薬といえば飲み薬に決まっている。粉か錠剤か、トローチか。ぱっと思いついた諸々の薬種を期待して目を凝らした袋に記載されていた文字は――。

「……坐……薬」

すぐには理解できず棒読みしてしまう。

目と目が合った瞬間、美伊菜の顔色がさらに赤く、茹でダコめいた有様になった。

(坐薬。体温で融解させ服用する、固形の外用薬)

その多くは、肛門から挿入する――。そこまで考え至ってようやく、彼女が赤らんだわけを理解する。

「お、おまつ……！ ……あのな。いくら苦い薬が嫌だからって、これはないだろ」

「だ、だってだって。あのお医者さん、『薬受け取ってくれなきや帰らないわよ』って、しつこかったんだもんっ」

愚図りつつ言い募る様に、呆れた。「お尻に薬入れるなんて嫌」ってことのほうが先に

立つだろう、普通。

「と、とにかく。なんでもいいから、後で服用しとけ」

意識した途端こちらまで恥ずかしさが込み上げる。脳裏には「坐薬を挿入している美伊菜の図」が思い浮かび、鼻血を噴きそうになった。

不埒な想像は即座に首振り打ち消して、赤らんだ顔を見られないよう、背を向けて一歩ドアに向かって右の足を踏み出す。

「ま、待って！ あ、の……じ、自分じゃ怖くて入れられないのっ。だからっ」

引き止められてまた振り向いて、すぎるように見つめてくる涙目に出迎えられる。

「ばっ、馬鹿言うなっ」

ドキリとさせられた。潤む瞳が美しく思えたのと、つい今しがた思い浮かべかけた痴態をこの目で見られると、期待してしまったから――。

「うゝ。お願いっ、お兄ちゃん」

「ど、どうしてもってんなら誰か。同僚のメイドにでも頼めっ」

「お兄ちゃんじゃなきやあつ！」

ドクン。心臓が高く跳ねたせいで、息が苦しい。涙目で必死の美伊菜と言葉を交わすだけで頭の芯まで茹だつて、うまく思考が働かなくなってしまう。

心なしか、全身も熱い。右ポケットの中の鍵を握る手も、いつも以上に汗ばんでいた。

「他の人じゃ、ヤなのっ……」

いつも以上に幼く映る、愚図り様。さすがのように濡れた瞳を向けてくるその様が、幼少期の美伊菜と重なって見えた。

風邪を引いているせいでメイドとしての態度や所作が剥げ落ち、より強く身に染みついている妹としての感覚が強まっているのかもしれない。

心根をくすぐる妹の声に惹かれ、足が止まる。頭がクラクラするのは、室内に立ち込めた美伊菜の体臭。その甘さのせいだ。

「……っあ」

甘苦しさに耐えかね漏らした吐息の熱っぽさに、自分自身が驚いてしまう。

「けほ、けほっ……」

目の前では苦しげに眉を歪め、美伊菜が咳き込んでいる。

「……薬。入れたらすぐに寝るんだぞ」

言ってしまったから、盛大に心の臓が弾む。それでもう、後戻りはできなくなった。

「あ……。……んっ♡」

赤ら顔でうなずく少女が起き上がり、微笑んでくれる。それでまた、いつそう心掻き乱され、息苦しさが強まった。

ベッドの上でうつ伏せになって尻を持ち上げる様を、半ば夢見心地で観察する。

「お、お願い、します……」

ぺろんとめくれたスカートの下から、剥き出しの尻肉がお目見えした。

(相変わらず、でかい……)

桃のようにふくらんだ安産型のヒップ。背後に回って見てみると、貞操帯のベルトに締められた細腰との対比もあってよけいにその大きさが際立って映る。

小刻みに震える尻肉を見てみると、昨日足指で愛撫した際に感じた感触、弾力、温度に至るまで。すべて鮮明に思い出されてきて、思わず前屈みの姿勢を取ってしまった。

「ふ、あつ……？ や、やだ。そんなに顔近づけちゃ、は、恥ずかしいよう」

意図せず顔が美伊菜の臀部に近づく格好になり、小さく揺らいた尻がわずかに逃げる。その羞恥の様相にまた、ズボン奥の肉棒が弾む。

黒い貞操帯の存在感があるだけに、火照りを帯びてもなお白い柔尻が際立っている。

チカチカと白熱が散った視界に、貞操帯との境目そばで息づく小さなすぼまりが飛び込んできた。

(オナニーを見ちゃった時以来、だ……)

じかに触れるのは、初。意識してよけいに羞恥と緊張を身に染ませ、感激の視線を張りつける。見つめるほどに、すぼまりは収縮の間隔を狭めていった。

「い、息吹きかかっちゃってるっ、ふあつ、あ……近い、近いようっ顔お……」

声に多分の恥じらいをにじませたまま。鼻息を浴びた細腰が縦に弾む。足を閉じているためにぶつくりと中央に寄せ集められた股肉も、小刻みに震えている。

「よおく見ないと……入れられないだろ？」

美伊菜も、昂奮している。確信を持って、さらに一步踏み込んだ。

恥じらいが強まるほどに赤みの増す尻肉に、そつと両の手を這わせてみる。右の手にはすでに坐葉がひとつ、握り込まれている。

「ひゃあ……お、お兄ちゃん!!」

「動くと手元狂うから。じつと……してろよ?」

ピクリと跳ねた尻肉をなでつつ。ささやくように言い含めれば、恥じらいながらも少女はうつむき、口つぐむ。

「熱く、なってる……な……」

昨日コタツで触れたのと違い、内側から熱が込み上げてきている感じがした。汗ばみっぷりは昨日のそれと同等で、足指よりも器用に動く手指に尻肉が吸いついてくる。

(それに……足の指で触るのより、もつと……)

微細な動きに合わせ姿を変える肉の柔らかさと弾力に魅せられ、息を呑む。

耳に届く少女の声の甘い響きと、指先に伝わる身震い。両方に煽られ、嬉々として指を蠢かせた。

「っ、ふあ、あ……っ。あ、遊んじややあつ」

ぐっ、と少し力を込めて割り裂けば、谷間で息づくすばまりがよりよく見える。

「っひ、あ!! ふわ、あ。ああ……!!」

瞬時に身を強張らせた少女をあやすように、左手で骨盤付近をなでさする。そうして再

度、両の手で尻肉を割り裂いてみせた。

美伊菜の息遣いに合わせて蠢く、小指の先よりも小さなすぼまり。穴の周囲のしわが広がったり縮こまったりする様が、なぜだかやたら卑猥に思えて、また。ひと回り太く、肉の棒がふくらむ。

(ここに、本当に入るのか?)

手の温度で溶けないよう気をつけて、つまんでいる坐薬。先端が円錐形になったそののほろが何倍も太く見え、不安に駆られる。

カタッ——。

「ひうあ……っ！」

緊張で震えた指先が貞操帯に触れ、揺すり立ててしまった。

貞操帯と密着する股間を間接的に刺激された美伊菜が、甘く鳴いて腰震わす。尻肉に食い込む指に彼女の汗が滴って、さらに滑りやすくなる。

結果、圧力を強め、より深く指先を尻肉に食い入らせる必要に駆られた。

(柔いこの尻にもっと、ずっと……なに、考えてるんだ俺。葉を入れるだけ、なのに) 呼吸が乱れ、ますます胸が苦しくなった。ズボンの奥で張り詰める肉棒に血が集まりすぎたせいで、頭が眩む。この上なく昂奮してしまっている——。

「……っ。辛かったら、枕に頭落ち着けていいぞ……」

シートにじかに頭を乗せて首傾げ、こちらに、不安と期待に入り混じった視線をよこし

続ける彼女を氣遣った。そのつもりが、返ってきた言葉にまた、胸弾まさせられた。

「っ……見て、たいの。お兄ちゃんの顔……そのほうが絶対、安心できるから」

合間合間に咳をする。それでもほんのり上気する顔に笑みを絶やさないでいてくれる。見つめ合っているだけで、心臓が破裂してしまいそうだ。

「い、入れるぞ」

「ン……っ！」

これ以上手間取っていると、こちらまで熱で倒れてしまいそうな気がする。手にした坐薬を思いきって尻穴へ押し当てると、彼女が覚悟を決めて唇を噛んだのがわかった。

ぎゅぎゅうううっ……。

「お、おい。力抜けて……っ?!」

「んうっ、ん……っ！っ！」

坐薬の挿入を頼んだ本人が、息を止めて尻穴をきつく締め狭める。

(震えている……怖がってる?)

早々に気づいて、ゆっくりあやすようにまた、彼女の骨盤付近をさすってやった。

「大丈夫だから。任せろ」

なにぶん初めてのことだから、根拠はない。けれど極力丁寧に氣遣いながら挿入する旨を伝えてやると、涙混じりの表情から強張りが抜けた。

「ごめん、ね……あ、甘えちゃってる。わかってる、のっ……」

病気の時は誰だってそうなる。

そんな時にこそ甘えて欲しい、頼られたいって思うヤツだっているんだ。

(俺、だつて……)

嬉しくて、頭がクラクラして——信じられないくらい、昂奮してる。

「息……吐いて。ゆっくり、な」

「はあ、はっ、あ……すう、はあ、すう、はあ……っ」

呼吸に合わせてまた、尻の穴が開閉する。今度は内側の肉壁、その薄桃色の組織が蠢く様相まで、束の間ではあったが視認することができた。

(肉の、色……だ。美伊菜の中っ……)

綺麗だ。素直な感情が瞬く間に胸に敷き詰められていって、ひと際甘苦しい感覚に陥った。坐葉を持つ指先が、震える。

ぐ、ぐぐっ……。

表情と同時に尻穴の収縮にも目を凝らし、坐葉を押し入れていく。息を吐くタイミングを見計らい、少しずつ、また少し。

「っ、は、ああ……!! おにっ、いっ……」

「ここにいるっ。お前の目に映るところに、いるからっ……」

左の手で押し広げる尻肉を、指先が食い入るくらい強くもみ立て、存在を強調した。乱暴な手つきではあったけれど、少女は安堵したみたいに熱い吐息を漏らしてくれる。

ぬ、にゅっ……。

「ふぁうっ」

穴の収縮に合わせて円錐状の坐葉が滑り込む。まるで葉のほうが吞まれているようなその光景に目を奪われて、力を抜くことを忘れた結果。

つん……っ。勢い余った指先が、坐葉がすべて吞まれたのと同時にすぼまりを突いた。

「ふうっ……あ……♥」

(さ、触っちゃまったっ、指で……美伊菜のっ、お、尻の……穴ッ！)

坐葉を呑み終え安堵していたすぼまりは、ほんのわずか口を開けていて、思った以上に柔らかく。穴の周囲のしわを突つついた指先が、やんわり押し戻されてしまった。

なにより、指にキスをされた——そんな風に思えたほど。小さな肉穴はわずかに湿っていて、触れた途端にヒクヒクと蠢き、吸いついてきてくれた。

「おっ、奥までっ。お葉っ……押しっ、込んでえ……っ」

歓喜をさらに一段階高みへ押し上げようとフリフリ。尻揺らしながら少女が鳴く。

艶を多分に含んだ懇願を撥ねつけられるほどの冷静さは、とうにない。

「深呼吸、してろよっ……？」

ぐっ、ぐぬぬぬんっ……。

「んく！ つす、う……はっ、あ、あっ、すう、はっ、ああああ……っ」

人差し指を美伊菜の尻の中へねじ入れて、指先に当たる坐葉をより奥へ押し入れる。

(滅茶苦茶ヌメヌメ、して……。あ、あつたかつ、い……。つ……。)

指一本入るのがやつとの細い道。全体的につるりとしていて、取っ掛かりの少ない肉の壁が、異物である指と坐薬を締め上げる。

身体の外よりずっと熱を孕んでいるけれど、湿り気が多いためか生ぬるく感じられる。そのおかげできつい締めつけも痛みを覚えるほどでなく、むしろ肉の壁にくすぐられていのように感じられ、面映いくらいだった。

「ふあんっ！ い、今、奥のほうツンッて、した、ああっ……」

おとがい反らせた美伊菜の声がまた一段、甲高く跳ね上がる。絡みついてくる柔肉壁を振りほどきながら、嬌声の残響を聞き、ついに指の根元まで突き込んでしまった。

(ぎゅうぎゅう締めつけられて……。人差し指がジンジン……。してる)

年頃の少女の突き出された尻。その奥に息づく秘密の穴の中に、自分の指が入っている。非日常的な光景が強烈に網膜に焼きついて、ますます肉の棒に血液が集結する。

少しでも鎮まれと願うように、荒く息吐く美伊菜と一緒に深呼吸を繰り返す。

「もう、抜く……。ぞ……。っ？」

本当は、もっと、ずっと指先に甘美な心地を味わっていたかった。

でも、風邪で弱ってる美伊菜に無理はさせられない。名残惜しさを噛み殺しながら、役目を終えた指を引き抜いてゆく。

「ふあっ、あ、あああつ……。グ、グリグリっ、ひ、響いちゃうようっ……。」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。美満の方に入ってください。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!

ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ

<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元
ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!